



先日、藤女子大学未来共創フォーラムの一環として、「予測困難な社会を生きる子どもたちの育ちを保障する保育・教育とは」をテーマに学科主催の公開講座を開催しました。前回のシャロ一むでも、今、日本の教育は「何が起るかわからない世の中」と言われている。この社会において「答えがみつからない問題」に向き合い、みんなで解決していく力を育むことが目指されていることに触れました。また、そのためには様々な情報を的確にとらえる力、みんなにとって一番良い方法を探る柔軟な考え方、自分の考えを相手に伝える力、他人と円滑に人間関係を構築する力などを身に付けていくことが望まれることも挙げました。この公開講座においても、「予測困難な社会」を生きるためにこれからの子ども達にどのような力をつけたいか、またそのための大人の役割について幼稚園長、小学校長、大学教員の3者にそれぞれの立場からお話いただきました。

私はこの講座で印象に残ったのは、小学校の立場からお話いただいた校長先生が、これからの子どもに育てたい力として「関係付ける力」を挙げていたことです。小学校での各教科の学習のみならず、学校行事、その他学校生活全般、さらには家庭生活をも含んだ中で児童が得る学びや体験を活かして目の前の問題を解決していくには、この「関係付ける力」を育むことが大切だとお話をいただきました。また「関係付ける力」を高める学習とは、生活経験から考えること、自分の意見と友達の意見を比較しながら新しい考えを形成すること、他教科で身に付けた事柄を活用、発揮しようとする、身に付けた事柄を生活に活かそうとすること等が含まれたものであることが挙げられていました。

このお話を伺っている時に、子ども達の遊ぶ姿が思い浮かびました。幼児期の子ども達にとつての問題解決場面の多くは、自分のしたいことを成し遂げるにはどうしたら良いかを考える場面かと思えます。わずかな生活経験で得た情報をもとに、友達とやりとりしながら持っている知識や力をフルに使ってやりたいことを成し遂げようとする、それは先に挙げた「関係付ける力」を育む学習そのものだと思いました。幼児期の子どもが「問題」としていることは時に大人にとっては、たわいのないこともあるかと思えます。しかしながら、その「たわいのない問題」に対して向き合って解決することの積み重ねが、その後の学習につながるのだとすると、傍で寄り添う大人も、そのひとつひとつを大切な時間として捉えたいものです。

これからの世界を生きる子ども達(2)

藤女子大学人間生活学部保育学科 教授 高橋 真由美



このお話を伺っている時に、子ども達の遊ぶ姿が思い浮かびました。幼児期の子ども達にとつての問題解決場面の多くは、自分のしたいことを成し遂げるにはどうしたら良いかを考える場面かと思えます。わずかな生活経験で得た情報をもとに、友達とやりとりしながら持っている知識や力をフルに使ってやりたいことを成し遂げようとする、それは先に挙げた「関係付ける力」を育む学習そのものだと思いました。幼児期の子どもが「問題」としていることは時に大人にとっては、たわいのないこともあるかと思えます。しかしながら、その「たわいのない問題」に対して向き合って解決することの積み重ねが、その後の学習につながるのだとすると、傍で寄り添う大人も、そのひとつひとつを大切な時間として捉えたいものです。

今年度の学園研修

認定こども園カトリック聖園こどもの家

園長 坂本 貴裕

北海道カトリック学園では、これまで各園の持ち回りで公開保育を行い、研究を進めてきました。しかしながら、コロナ禍においては大勢の職員が一堂に会することが出来ず、これまでとは異なる研究を行うことといたしました。

今年度の研究は、カトリック学園のコンサルティングを務めていただいている石田氏にアドバイスを受けテーマを「人気園になろう」と題し、安定した経営を目指して各園がPDCAの手法を取り入れて研究を進めています。

カトリック聖園こどもの家では、教職員、保護者、未就園児の保護者にアンケートを用いた意識調査から研究をスタートさせました。教職員へ園の特徴を調査したものは、「キリスト教を基盤とした情操教育を行っているところ」、「職員の温かな雰囲気」を約7割の職員があげていました。今後ともこの意識を大切に日常の保育実践に



学園全体の研究のまとめとして、年度末に各園の発表が行われます。他園に学びながら自園の魅力度を高めるなど、14園の組織力を生かした研修の成果を上げたいと考えています。

闇の中にあなたの光を

学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治

イエスの誕生を祝うクリスマス。しかし、イエスがいつ生まれたのかということは分かっていません。12月25日にキリストの誕生を祝うようになったのは四世紀のことです。世界が最も闇に覆われるこの時期に再び太陽が力を増し、世界に光が満ち始めることをキリスト教的に祝うようにしたのです。キリストによってもたらされた神の愛が世界の闇闇を打ち払い、世を照らす光のように広がっていくことをイメージしたのです。

では、世界の暗闇とは何でしょう。クリスマスの場面を語る聖書を見てみましょう。イエスの両親マリアとヨセフは皇帝の命令により人口登録をするために出身地のベツレヘムへ旅をしていました。途中マリアは臨月を迎えます。頼る者もない二人、無情にも宿泊を断られ続け、結局彼らは、臭くて汚い家畜小屋に泊まるしかありませんでした。イエスはそのような状況で家畜の餌である藁の上に生まれたのです。そうです、彼らはまさに人々に見捨てられ闇の中で行き場もなく、さまざまな苦しむ多くの人々の象徴です。

では、二人の宿泊を断った宿屋の主人たちは意地悪な悪人だったのでしょうか。そうではありません。満室だったので宿泊を断った。ただ当たり前に普段通りの仕事をしていただけです。彼らにとってヨセフとマリアはその夜に訪ねてきた特別なカップルではなく、泊まるところがなく、野宿を余儀なくされた他の多くの旅人の中に数えられる顔も名前もない2人に過ぎませんでした。宿屋の主人たちは私たちと同じように、あたり前の日常生活を送っていただけです。そして、このことは今も変わっていません。イエスとその両親はまさに現代世界に溢れている「隅に追いやられた人々」なのです。

世界には二千万人を超える難民がいます。日本にも、難民や困難な生活を強いられている外国人、生活に困窮している多くの世帯があります。また、様々な理由で社会の片隅に追いやりられ助けも求められずにいる人達があります。彼らは私たちにあって、自分とは関わりのない世界で苦しむ大勢の中の一人、統計上の数字の中の一人に過ぎなくなっているのでしょうか。テレビやネットのモニターに映る悲惨な現実を心を痛めてもそのために何かをしようとはしてはしません。そうです、聖書に出てくる宿屋の主人たちは善良に生きてあたりまえの生活をしている私たちです。こうして、私たちは知らぬ間に私たちのドアをノックする救い主の家族を闇の外に追い出す側の人間になっているのです。世界の闇とは私たちの無関心が作り出しているのです。クリスマスは、その闇を私たち自身が打ち破るようにと招かれている季節です。

心と身体を結ぶ食育の大切さ

旭川藤幼稚園 保護者 下元 千尋



私には去年の3月旭川藤幼稚園を卒園した長女（小学2年生）と去年の5月に満3歳で入園した次女がいます。私と園との関わりは今年で5年目です。幼稚園の園庭は娘達にとって一番好きな遊び場で、お迎え後は「遊んでから帰る!」と言い出したら聞く耳を持ってくれません。

広々とした芝生を駆け回り、立派なアスレチック遊具に登ります。また、園庭の奥には手間隙を掛けて職員の皆さんと園児たちで育てられた「ふじ畑」が広がっています。1年を通して種まきから日々

の生長を観察し見届け、園児自らの手で収穫をして味わう所までを教育の一環とし、娘達も収穫した野菜を持ち帰った時は「お家の人と一緒にお野菜の土を洗ってねって先生が教えてくれたよ」と言って嬉しそうに手伝ってくれました。

園での活動により、娘達は食材の大切さを知り、食事は自分と大地の生命を結びと想像できる豊かな思考を育んでくれました。食べ物に無駄にせず、感謝を忘れない心、最近の世の中では育ちにくい部分に感じています。未来の子ども達に一番身に付けて欲しい心です。

日々の園活動や先生方の温かく且つ、熱心な教育のお陰で健全に育つ為の大事な心が養われています。この場をお借りして感謝をお伝え致します。

園全体を包んでいる柔らかく優しい神様の愛に祈りを捧げながら、心健やかに、そして体を丈夫に、人に優しくなれる園の子ども達の未来を祈ります。



笑顔いっぱい

さんぽみち

カトリック聖園てんしのおうち

カトリック精神に基づき 保育で取り組んでいること

保育士 大塚 里恵

新たな友達を迎え、新年度が始まった4月。ようやく子ども達も園生活に慣れ、笑顔溢れる姿が増えてきました。てんしのおうちでは、毎日の朝の会、食事、散歩に出かける際にお祈りする時間があります。朝の会では、「おはよう、おはよう、イエス様」と子どもたちの元気な歌声から始まります。その歌声から“今日も友達と楽しく遊ぼう”と、子ども達の心の声が聞こえてくるようで、私自身“今日はどんな風に子ども達と過ごそうかな”と思いを巡らせている時間でもあります。また、散歩に行く際は、廊下のマリア様の前で手を合わせ、お祈りをしています。乳児クラスでは、始めは保育者が主導となって行っていましたが、次第に子ども達自身がマリア様の前で立ち止まり、そっと手を合わせるようになりました。お祈り中、一生懸命に言葉を紡いで行う子どもたち。まだとても小さな子どもたちにとっても、落ち着ける瞬間に感じているようです。このお祈りが、宗教教育に触れる第一歩であると思います。

マリア様の前でそっと合わせた手で、今度は友達と手を取り合ったり、時にはちょっぴり喧嘩をしながらも、互いを思いやれる心を育てていってほしいと願っています。



花川マリア認定こども園

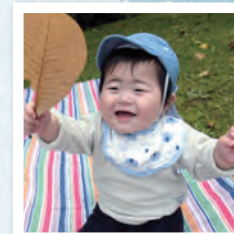
成長の喜びに満ちた日々

保育教諭 酒見 彩子

園周辺の木々が赤や黄色に色付き始め、秋の深まりを感じる季節になりました。天気の良い日には積極的に戸外遊びを楽しんでいます。0歳児クラスの子供達は散歩車に乗り、色付く木々、カサカサ鳴る落ち葉の音、木の実の感触等、自然を全身で感じながら、大学の敷地内を散歩しています。園庭では芝の上を沢山歩いて探索したり、身体を思いきり動かし元気一杯です。

0歳児の成長は目覚ましく、つかまり立ちが出来るようになった、一人で歩いたと日々喜びに満ちています。1歳5か月の女の子の今のブームは、指差しで友だちの名前を聞くことです。保育教諭が「〇〇君だね。」と答えると、そのやり取りに満足し、嬉しそうです。ある日、いつもの様に指差しをする中で、壁の十字架を指差し、手を合わせました。その子にとって、神様が身近な存在となっている事を感じ、大変感動した出来事でした。

様々な経験を重ねる中で日々成長している子ども達。この成長と共に喜びながら、寄り添い、見守ってまいります。



大麻藤認定こども園

保護者とのかわり

保育教諭 金澤 聡子

とても慎重で初めてのことが苦手な0歳児クラスのAちゃんは、冬になると初めての手袋を嫌がり、雪遊びが出来ず、毎日の登降園も手が冷たくなって困っていました。手袋を見るだけで泣いてしまい、園でも家庭でも試行錯誤の日々でしたが、ある日R君が新調した手袋をAちゃんに試してみると、はめることが出来たのです!すぐにお母様に伝えると早速R君と同じ手袋を買い、手袋問題は解決。Aちゃんは雪遊びを楽しめるようになりました。私もAちゃんのお母様も大喜びで嬉しい出来事だったのですが、その時にR君のお母様も一緒になって喜んでくれたことがまた嬉しくて、心に残っています。

私がこの仕事をしていて一番幸せだと感じる瞬間は、子どもの成長を感じる時です。そして、それを保護者の方と一緒に喜び合えた時は、仕事にやりがいを感じる瞬間でもあります。Aちゃんの手袋は、「嬉しい!」が2倍、3倍にもなった出来事でした。

今年もだんだんと寒くなり、手袋の季節がやってきました。先日、Aちゃんは手袋をはめて登園してきました。お母様と去年のことを懐かしく思い出しながら、この一年の成長をまた一緒に喜ぶことが出来ました。



真駒内聖母幼稚園

あらたな一歩

教務主任 三好 加奈子

今年度自園では、異年齢と年齢ごとの活動を上手く使い分けながら、コロナ禍に見舞われた去年の経験を活かして、一つでも多くの原体験を重ねられるようにと行事を進めています。

七五三では、密を避けるため保護者の方の参加は叶いませんでしたが、教会で神父様と一緒にこれまでの成長へ感謝の祈りを捧げることができました。手を合わせ、心を合わせ、声を合わせて歌う子どもたちの姿に、感染対策で歌うことも控えていた時期を思うと「ありがとう かみさまありがとう!」澄んだ歌声が一層心に響きます。

また、以前は親子遠足で行くこともあった動物園。今年は園バスで、動物園再開のその日からクラスごとに分散して行きました。通りすがりの人にも「こんにちわー!」と挨拶しながら、本物の動物たちの動きや匂い、鳴き声などを感じつつ、檻の中を食い入るように見つめる子どもたち。「たのしかった〜!」「また行きたいね。」と喜ぶキラキラの笑顔を見ると、行ってよかったと改めて思います。この経験は、お店屋さんごっこでの「どうぶつえん」に繋がっています。

これまでの「当たり前」を見直しながら、今できる限りのことを行い、日々への感謝と共にこれからも子どもたちの豊かな経験を育てていきたいと思います。

